

## 審査の結果の要旨

氏名 周 穎

論文題目 看護動線に基づいた急性期病棟の建築計画に関する基礎的研究

この論文は、急性期病棟における観察・アンケート・ヒアリングの調査を通して、看護動線の現状を把握し既往研究との比較考察を行って看護動線の経年変化とその原因・問題点を明らかにし、看護しやすい病棟環境のあり方を建築計画的視点から提示することを目的としている。

本論文は、序章ならびに5章より構成される。

序章では、研究の背景・目的・方法、そして既往研究の概要、用語の定義などを述べている。

第1章では、一般の4病棟での看護動線観察調査と典型的看護動線に関するヒアリング調査を通して、看護作業と動線の実態を把握している。さらに、これらを既往研究と比較し動線の変化を考察している。また患者属性の諸因子や看護方式・業務分担など諸要素の看護動線への影響について考察を加え、その施設的対応上の問題点と計画上の示唆を行っている。

第2章では、HCUの1病棟での看護行為観察・実態把握を行い、HCU病棟の看護動線の特性を考察し、いくつかの示唆を提示している。また、HCU病棟が登場してきた背景、その管理者の考え方、ICU病棟との使われ方の相違を分析している。

第3章では、看護環境・体制の激しい変革の下で病棟で展開されている看護業務をアンケート調査を通して、看護スタッフの立場から病棟平面に対する評価とその指標を得ている。看護動線観察調査のデータを用いて、個室化・PHCシステム・SPDシステムを基にした分散型廊下収納方式導入の看護作業・動線への影響、アンケート調査に基づく電子カルテシステムの看護作業への影響を

明らかにして相対的評価を与えている。

第4章では、以上の三章を総括し、看護動線の経年変化の原因を解明するために、動線に影響を与える病棟平面的、患者的、運営的、看護師的な各要素を抽出し、客観的な観察調査と主観的なアンケート調査の結果を比較することによって、それぞれ要素の変化の看護行為・動線への影響を明らかにしている。また、病棟平面の変遷やIT化がもたらすであろう病棟平面の今後の方向性についての考察を通して、各患者の状況に合わせた看護がしやすい看護拠点のあり方を検討している。さらに、モデル平面に対するシミュレーションによって、看護単位の小規模化が看護動線にもたらす変化を明らかにしている。

第5章では、結論として、以上の研究結果に基づいて既往研究で示された指針との比較を実施し、今後の病棟計画への新たな指針の提言を試みている。すなわち、看護動線とスタッフステーション(以下SSと略)の配置については依然として相互間の移動が激しくこの距離が移動距離に大きな影響を与えること。病室の近くでの物品・情報の入手は移動距離短縮の決め手となること。IT化や医療工学技術の進歩にも拘わらず「人の手による看護」の基本は変わらないこと。患者の高齢化重症化に伴って間接看護が増加する一方で観察の容易さや直接看護の充実が望まれること。個室化に伴い看護動線は長くなり観察を困難にしていること。病室内処置の増加で処置室とSSの近接性は薄くなったこと。間接看護の省力化に貢献するはずの医療ITの導入は逆に看護間接業務の負担を増やしていること。看護師の病室滞在時間割合の増大は見られないことから直接看護の改善にはIT化のみでは貢献できないこと。一方で看護拠点の分散化や看護単位の小規模化は直接看護の充実の主要な手段になりうること。病棟面積の増加や個室化に伴って全体的に観察しにくい病室が増え、物音を把握することが重要性を帯びてきたこと。などである。

以上のように、本論文は現代の急性期病棟の諸問題を実態観察と分析を通して考察し、今後の病棟計画に対する基本的な知見を示し、建築計画学の発展に大きな寄与したものである。

よって本論文は博士(工学)の学位請求論文として合格と認められる。